あびこの文化

発行人
美崎　大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

プロジェクト報告会＆懇親会を開催します

■日時　10月29日(日)　13時半～16時半
■場所　近隣センター「こもれび」
　我孫子市東我孫子1の41の33
■参加費　1500円(飲み物、茶菓・つまみ付き)

毎年開催している「プロジェクト報告会＆懇親会」を10月29日に開催します。今回の会場は初めての使用ですが近隣センター「こもれび」です。名門ゴルフ場「我孫子ゴルフ倶楽部」に隣接する緑豊かな環境に囲まれた「こもれび」は都会を離れた別荘地を連想させる建物です。

当日、前半はそれぞれのプロジェクトの1年間の活動状況や成果が発表されますが、後半は懇親会を予定しています。普段一堂に会することのない会員同士で懇談を楽しんでいただきます。

◎出席される方は次のメールまたは電話にてご連絡ください。(今回は「往復はがき」は送付しません)

メール　mss_misaki@yahoo.co.jp
電話　04(7182)0861　美崎まで

・東我孫子(最寄駅)　南口から徒歩約5分
・天王台駅　南口から徒歩約18分

今年も「市民のチカラ」に展示出展

「市民のチカラ」は我孫子市の市民活動団体が中心となり、行政・学校・企業・商店など多様な主体と連携しながら実施するまちづくり交流イベントです。

今年の「市民のチカラ」は11月25日(土)・26日(日)に開催されます。今年度全体の方針は

①市民活動を知らない人が、地域貢献に関心をもつきっかけづくりの場とする
②子どもからシニアまで、多世代が楽しみながら市民活動を知り、交流する内容とする
③市民活動団体同士がお互いの活動を知り、交流を深める機会とする

となっており、当会は今回「岡田武松と新田次郎」をテーマに展示をします。

第10回ベイ・東葛地域連絡協議会・交流会開催

前号(7月号)でもお知らせしたように「千葉県観光ボランティアガイド」団体のうち、「ベイ・東葛エリア」18団体の協議会・交流会が11月18日(土)我孫子市で開催されます。我孫子市では当会のほか、あびこガイドクラブ、ふるさと我孫子ガイドの会の3団体が主に市内のガイドを実施しておりますが、今回はこの3団体が共催という形でホスト役を務めます。我孫子市と我孫子市教育委員会からも後援を頂いています。

既に当該18団体に案内状を送付しておりますが、参加者は約100名を見込んでいます。

当日は、午前中けやきプラザ9階ホールで交流会、昼食(昼食時に我孫子紹介のDVDを観てもらう)を挟んで、午後は3つのコースに分けて我孫子市内を案内し、3時頃解散となります。コースは次の3つ。

コース①我孫子宿と利根川東遷
コース②白樺派文人たちの足跡をたどる
コース③古代の我孫子に思いを馳せる

わずか一日だけですが、交流会や史跡案内を通じて近隣・周辺地域のボランティアガイド団体に我孫子の歴史と魅力を知ってもらうと同時に我孫子の良さも実感していただくことを期待しています。

リレー連載「白樺派と私」

本の紹介「リーチ先生」(原田マハ著)

加藤　マリ子

バーナード・リーチ、濱田庄司、河合寛次郎、柳宗悦、高村光太郎、富本憲吉、武者小路実篤、等々が登場する史実に基づいたフィクションと言われたら、我孫子に住んでいる者としては関心を持たずにいられない本である。まして「第三十六回新田次郎文学賞受賞作」となれば、読ませる本に違いない。どこか懐かしいお洒落な文様と赤い表紙の装丁にも魅了されて読み始めた。出だしから期待通りの読み応えで、手放せなくなった。

しかし、この物語の主人公は著名な彼らではなく、無名の陶工、沖亀乃助である。しかも、この話の始まりは父亀乃助のことを殆ど知らない息子の高市(こういち)とリーチとの出会いからである。小鹿田(おんた)で日々土を耕し、陶芸には未熟な高市の目を通して、読者は知らず知らずのうちに陶芸の世界の真髄を知ることになる。これがプロローグ。

第一章は、高村光雲宅の書生となった亀乃助と当時二十二歳のリーチとの出会い。この二人を繋いだのは高村光太郎。亀乃助こと「カメちゃん」は「自分は芸術のことなど何も分らない無粋な人間だ」と思っていたが、「君にも芸術家になれる素質が十分にある。そして君にもいつかきっと海を渡る日がくる」とリーチに言われ、ずっとリーチの通訳と世話をすることを決心する。銅版画展を開催したリーチの下に集まったのは後に白樺派と言われる画家と文士の卵達だったが、亀乃助は知るはずもなかった。

第二章。上野に居を構えたリーチ。亀乃助は、リーチと柳の芸術についての激しい口論を幾度も聞く。互いに「西洋かぶれ」「日本かぶれ」と激しくやり合うが、芸術に対する強い情熱を共有する時間を二人は楽しんでいると思えた。しかし、ゴッホの絵を見せられたリーチは、柳が日本の芸術を否定していたのではなく、西洋からの新しい風を入れようとしていたのだと目覚め

る。

第三章。リーチは古典的な日本の陶芸を学びつつ、イギリスで伝統的に作られてきた陶器を創ることに挑戦しだした。しかし、迷いがでて北京へ移ってしまう。亀乃助は一緒に行きたい思いを整理し、日本に残り、リーチが戻ってくるのを待つことにした。リーチの配慮で柳邸の書生となり、我孫子での生活が始まる。一方、柳は、リーチが北京にいることに疑問を呈し、北京までリーチを説得に行く。持参したのは亀乃助の創った白磁の瓶である。本当に好いものに出会ったとき、リーチはひたすら「好い」と言う。亀之助が作った白磁にその一言が発せられ、リーチは日本に戻ってくる。柳は、リーチが創作に力を注ぐことができるよう可能な限りの支援を約束する。この後の七〇ページに及ぶ我孫子での様子は、ぜひ直接読んでいただきたい。手賀沼の澄んだ水面、我孫子窯など、リーチの我孫子での暮らしはきっと一気に読めることでしょう。

第四章はイギリスでセント・アイヴス工房を創設しようと理想の土探しをするリーチ、濱田、亀乃助、そして恋人のシシア。太陽と月、東と西、日本とイギリスを繋ぐ懸け橋になりたいと思う亀乃助。

第五章。セント・アイヴスで初めての窯出しは・・・。やがて日本では関東大震災がおき、濱田は日本に帰ることになった。亀乃助にも自分だけの陶芸の道をすすむためにリーチ、シシアとの別れが来た。差し出されたリーチの大きな手は紛れもない陶芸家の手だった。こんな手を持つ人になりたいと師の手を握った。その後、戦争を境に亀乃助との連絡はとれなくなる。

エピローグ。時代が変わって、息子の高市はイギリス、セント・アイヴスの工房を訪ねる。ドアがかすかに開き、ろくろが回る音が響いていた。白いシャツにエプロンをつけた丸まった背中。それは、父亀乃助の後ろ姿とも思えるリーチ先生の背中だった。

（二〇一六年十月発行。集英社）

＊さて、どこまでが史実でどれがフィクションだろうか。調査・研究には程遠い私なのでリーチに詳しい会員の皆さんにお任せする。

＊表紙の「どこか懐かしい文様」はリーチの楽焼の絵付け文様だったことが4月号の飯高さんの原稿から分かった。懐かしいのはどこかで見ているからであるが、どこだろう？

白樺文学館かしら？

私が出会った忘れられない人々

菅野　哲哉

社会の第一線を退いてほぼ二十年、八十歳の声を聞くのも間もないせいか、現役時代が妙に懐かしく思い起こされる昨今です。なかでも仕事で出会って強烈なインパクトを与えてくれた人々が特になつかしく、このたび紙面上で彼らとの「再会」を思い立ちました。

「岡本太郎」

私は航空会社社員の二十歳代後半の頃オランダのアムステルダム空港に勤務していました。主として日本人旅客の到着、乗り換え、搭乗などに際する様々な支援を行うのが業務で体力と気配りが要求される勤務でした。一九六八年ころメキシコに向かう岡本太郎氏と養女の敏子氏をお世話したことがあります。新築間もない欧州一と言われた巨大なスキポール空港に大いに関心を示されたので、デザイナー、工期、建設に拘わる問題点などについて説明したのを覚えています。小柄ながら眼光鋭い岡本氏は独特のオーラを放っていました。「メキシコでかなりでかい壁画を制作する予定で一回では終わらないかも知れない」と語っておられました。同伴する敏子氏は秘書でもあり何かと細々と岡本氏の世話をしていたのを思い出します。

私はしばしおしゃべりの後、制作の成功を祈りつつ同氏をメキシコ行きフライトのゲートまで案内しフライトを見送りました。

翌年メキシコからの帰路に懐かしの再会を果たしました。岡本氏はトランジットラウンジのソファに座るやいやな「これ、お土産」と言ってメキシコ産のカフスを私に差し出しました。古代アステカの神を彫り込んだ見事な銀製のカフスでした。私は有難く頂きその後も特別の際にのみ身につけたものです。今でもやや黒ずみがかっているとはいえ、頂いたこの品は私のお宝の一つとなっています。

さて後日譚ですが、同氏が制作した作品は依頼人の倒産なども有り一時行方不明を伝えられていましたが、敏子氏が現地に飛んで確認の後、日本に運送して修正作業を終えて二〇〇六年六月に完成されました。この作品は「明日の神話」と呼ばれ、5.5m×30mの長大なアクリル塗料仕上げの作品で、現在、京王井の頭線渋谷駅とJR渋谷駅の連絡通路の壁面に掲示されていてその壮大な姿を鑑賞することが出来ます。第五福竜丸が被爆した際の水爆の炸裂の瞬間をテーマにしたものと言われています。1969年に完成した大阪万博広場の「太陽の塔」とともに、「芸術は爆発だ！」と強烈に主張し続ける岡本太郎の巨大記念作品として未来永劫に人々に問いかけ続けるものと思われます。

「立川談志」

二番目にどうしても挙げなければならないのが噺家の立川談志です。海外で仕事をする日本人とその家族達に落語を楽しんでいただこうと企画した「日航名人会」というプログラムが一時期海外邦人に大変人気がありました。

一九八五年頃名人会一行はロンドン、フランクフルトなどをめぐった後エジプトのカイロにやってくることになりました。当時エジプト駐在だった私は落語家達を気持ち良く迎えるべく支店長を始め日本人駐在員達全員を動員して日本人会、邦人企業などに大いに宣伝して準備万端整えてその日を迎えました。当時エジプトには千人余りの邦人が駐在しており、都合の付く方々が子供達も含め会場に溢れるほど集まりました。遠くは地中海に面したアレキサンドリアからもはるばる三時間をかけて車で駆けつける方々もいました。日本人会会長の挨拶の後いよいよお楽しみ落語会が開会です。今回は立川一門で二名の前座が各十五分ほど噺をしました。そのうちの一人は若き日の志の輔だっ

たように記憶しています。さて、いよいよ真打ち談志の登場です。外題は「らくだ」というやや不気味でユーモラスな落語です。談志特有の早口落語が展開します。テンポ良く噺が進んでいく内に会場に妙な雰囲気が感じられる様になりました。前列に陣取った数名の中年男性達がさかんに妙なところでかけ声を掛けたり「いいぞいいぞ、それからどうした」などと合いの手が入り出し、始めは談志も適当に相づちを打ったり、「元気だね。うんそうだそうだ」などと打ち返していたところ、中年グループの合いの手がエスカレートし、ついに業を煮やした談志は「やってらんねえ、やめた、やめた」と高座を立ってしまった。それからが大変でした。支店長は仮作りの楽屋で談志を懸命になだめる、次長役の私は会場をなだめるのに大わらわでした。原因は「親切」と思って出した酒にありました。こうした邦人慰労会などでは、アルコール、清涼飲料水、おつまみ、くだもの、などを部屋の後方コーナーに準備し自由に楽しんでいただくのが通例です。件の男性達は、当時、スエズ運河の浚渫工事に携わっていた邦人企業のスタッフで久しぶりの日本の演芸につい度を超えて飲んでしまった結果でした。私は、彼らを鎮め、過度の御仁には退場願い、一般観客には平身低頭で謝罪し、楽屋の経過を待つことにしました。度量の大きい支店長の懸命の説得の結果機嫌を直した談志は再度登壇してくれました。そのときの我々スタッフの安堵感は例えようもない大きなものでした。

さて、気分一新、機嫌を直してくれた談志の噺が「芝濱」でした。押えた地鳴りのような語り口に満場の観客は固唾をのんで聞き入っていました。長い語りが終わり、名台詞の「また夢になっちゃいけねえ」を語り終えると観客の拍手はいつまでも鳴り止みませんでした。まさに名演、熱演でした。私は、円生をはじめ同時代のどの名落語家よりもこの時の談志の「芝濱」は最高だったと今でも信じております。当時の談志は五十歳ころでまさにあぶらの乗り切った時分だったようです。その後も特に大切な高座ではじっくりと芝濱を語るのを習慣としていたと聞いております。べらんめえで破天荒な言行がとかく話題になりますが、彼の落語や演芸への傾倒ぶりは非凡で膨大な資料は今日高く評価されています。

「ジェームス・ビー・ハリス」

一九五八年(昭和三十三年)春に東京タワーが営業開始しました。優美で力強いフォルムは人々の感動を呼び、日本人のみならず多数の外国人も連日見物にやってきました。当時大学四年生だった私は他の仲間達と共に当時設立されたばかりの某国際観光ガイド会社で通訳のアルバイトを始めました。百二十五Mの展望デッキで周辺の景色や建造物の説明、時には日本の近現代史もブリーフする時間制限のない楽しい仕事でした。英語力向上に加えて都内の地理にかなり詳しくなったのもこの仕事がきっかけでした。当時駐留米軍の家族や、横須賀に入港する航空母艦乗組員などかなり大勢の米国人と親しくなり、これがきっかけでご家庭に招待されることが増えてきました。夢のような米国の家庭、高級車、BX、子供達の玩具類、教会、などどれも目を見張る物ばかりでした。

ある時、案内した米国人はなんとラジオ受験英語などでおなじみの James B. Harris 氏でした。一通りの案内と説明を終えたとき、突然、「菅野さん、私の番組にゲストとして出ませんか」と言われ返答に窮しました。外交辞令ではなくその語り口は真剣でした。考えたあげく私はなんと「NO」の返事をしてしまいました。同氏の英語は日本人の外国語学習の特徴をよく把握していて、明瞭、適度のスピードで話すあの語り口を実践していました。独特の鼻に抜ける発音と共に懐かしく思い起します。受験英語では同氏の英語にお世話になった方は少なくないと思います。私の「ラジオデビュー」は露と消えましたが今にして思えば何故勇気を出して「出演」に挑戦しなかったのか自分の勇気のなさがくやまれるばかりです。しかし同氏の飾らない親しみの持てる英語教育スタイルはその後の私の英語学習に大いに影響を与えたと思います。独特の話術に引き込まれて英語が好きになった受講生も少なくなかったと思われます。

「百万人の英語」と題する英会話教材は可成り長期間日本の英語教育界で利用されていたと思われます。ハリス氏を始め多くの外国人との遭遇は現在まで英語その他の外国語への関心を保ち続けてくれているとひそかに感謝している次第です。なお蛇足ながらその五年後に二度目の挑戦で「通訳案内業免許(ガイドライセンス)」を取得できたのもハリス氏の無言の頑張れの声援があったからかも知れません。

あびこだより78号

「大人の楽しむ昔話」

関口小夜子(昔話語り部)

「むかし、むかし、あるところに…」テレビもラジオもなかった時代、世界中の家庭で子どもたちは、大人たちからお話を聞いて育ちました。

語り手の語る言葉一つ一つに、聞き手は想像をふくらませ、胸をわくわくさせて聞き入りました。お話が終わると「もう一回、もう一回」と同じ話をせがみました。どこの家庭にもあった、ひと昔前の光景です。

経済が発展し、ケイタイ、スマホ、パソコン等々、人々のくらしはとても便利になりました。しかし、便利になった分だけいつも何かに追い立てられているような忙しさを感じるのは、私だけでしょうか。

今回「我孫子の文化を守る会」より、昔話の語り部の依頼がありました。楽しんでいただけたら嬉しく思います。

お話のタイトル

1、ヒバリの金貸し　2、水乞い鳥　3、ネコの嫁さま
4、鯉の願い　5、蛙ぼたもち　6、お姑さんとお嫁さん　7、トカゲのシッポ　8、四本目の足
9、やまんばの反物　等々

(講演者のプロフィール)

☆岐阜県美濃加茂市出身、我孫子市寿在住(我孫子の自然に魅せられ、2003年東京都荒川区より転居)
☆東京子ども図書館　お話の講習会第7期修了生
(1984年12月)☆以後、語った昔話は50話を超える。

第126回史跡文学散歩報告記

「江口章子縁の地と旧土村(つちむら)を訪ねる」―柏散歩(詩人江口章子の生涯)

海老原　亀夫

五月二十六日を最後に、雨らしき雨が全く止まったままの日照り続きが二週間を越えてしまい気象庁の梅雨入り発表にも拘らず、さらに雨なしのまま何と二十一日間。この間我が読売巨人軍は敗けも敗けたり十三連敗を続ける有様で頭の中は土砂降りだったのでしたが、唯一の希望が越岡さんが率いる文学散歩でありました。

私がこの会に入った経緯は二年程前の「田端文士村を訪ねる」に興味を覚え、恐る恐る同行させて頂いたことがきっかけなのでありますが、その後会報に次々と興味のある散歩の様子の数々を目にするにつけ、次第に引き込まれたのが本音であります。

私は八十歳を越えているのですが、永年同業者として協力し合ってきた先輩の息子さん(社長さん)からの誘いで引き受けた仕事に現在も従事中という事情もありまして毎回の参加には程遠く、指を咥えて羨んでいるケースが殆どのため、昨年の取手周辺探訪散歩が二回目、今回は三回目ということになります。

文学への興味というよりは歴史探訪が主力の私には「白樺派」すら分かりません。今回の中心的存在である『江口章子』がどのような作品を遺されたのかも分かっておりません。前回と前々回の経験から判断しまして、一よし行ってみよう一、との思いで飛び込んだというのが本音でもあります。

さていよいよ六月十八日、当日です。我孫子駅集合は九時、我孫子駅を出発したのが十八名、一同柏駅で下車、そこで合流された方が二名、合計二十名がたまたま待っていたバスに乗車、二十人ともなるとかなりの所帯です。早速、越岡さんからご説明があり、日程、道順、大方の所要時間等を耳にしたのでしたが、バスは数キロ走ったところで全員下車、歩きながらの説明が終わりきれぬ内に、本日最初の訪問地になる大きな和風屋敷前に到着した。地元でも大地主で有名な「薮崎家」に入ります。

(下写真、薮崎家、右の黒い壁は資料館)

訪問については事前に連絡はしていなかったようですが、ご当主がわざわざ出て来られました。庭の一角には倉があり、ここは数年前までは資料館として一般の方々に公開していましたが、諸般の事情で現在休館中のところを特別な計らいで扉を開けて頂きました。十五坪程の空間の周囲の壁はすべて掛け軸で覆われています。四分の一が大町桂月の作品で占められていて掲示していない作品を含めると全部でどのくらいの数にのぼるのか、当主ですら分らないようでありました。

(大町桂月の書軸が掛かる)

次いで薮崎さん(薮崎家)が檀家総代を務める真言宗・法林寺の「大公孫樹(大イチョウ)」と称する大銀杏を訪れます。柏市内で二本の指に入るのだそうだが、デカイ家のあとにデカイ木でかなりの刺激を受けてしまったようです。

「増尾城址」

戦国時代に入る前(多分、室町時代)にはこの辺にもお城があったようですが現在は約一万坪弱もある緑豊かな、柏市が管理する「増尾城址総合公園」となっています。

「広幡八幡宮」

創建は宇多天皇(第五十九代、八八七年～八九七年)の頃、「下総国第一鎮府宇多天皇勅願所」として鎮座となっていますのでどうやら鎌倉鶴岡八幡宮より時代は古いのかも知れません。敷地六千坪を擁する現在の社殿は平成九年に改築造されたものですが鳥居をくぐり社殿に至る佇いは仲々のもので堂々たる神社でありました。

(右写真、広幡八幡宮鳥居)

(昼食休憩)

「江口章子住居跡など」

増尾城址の森の木蔭から僅かに手賀沼を望む方向に数百メートル先に舌状台地があり、その突端には小さな墓地と粗末な小屋がありました。そしてこの小屋こそが大正から昭和に変わる間の僅かな期間とはいえ江口章子が独りで過ごした「あばらや」である。女性が独りで過ごす淋しさはかなり厳しいものがあったと思われ、この頃に彼女は精神を蝕まれたと考えられても不思議でなかったかも知れません。

(墓地の前に昔「あばらや」があった)

京都の大徳寺といえば千利休、豊臣秀吉を連想する日本茶道の大本山として有名な臨済宗の名刹ですが、その塔頭である聚光院の方丈を務める

戒仙と結婚した章子でしたが結婚生活もおよそ十年を過ぎた昭和十三年に離婚、養老院での療養を経て故郷の大分に戻り、五十八歳の生活をとじたとのことであります。

少林寺には今でも熱心な章子ファンが絶えることなく訪れ「手賀沼の水のほとりをさまよひつ 芦刈る音をわがものとせし」の歌碑(下写真)と茶道での花器の一種である「蹲(うずくまる)る」を連想させる小さな「五輪塔」が何とも心淋しく感じてしまいます。

(プロジェクト報告)
関東建築探訪報告書第四十一回
「近代建築の輝ける国宝第一号探訪」

稲葉 義行

六月の関東建築探訪は、梅雨の合間に、西洋建築として国宝第一号に指定された迎賓館を視察しました。

迎賓館の見学は人気が高く、事前の予約でないと本館内部に入場することは非常に難しいと云われておりました。今回の視察では「別の機会にしては」との意見もありましたが現地に行ってから決定しようとのことで、出発しました。

総勢十四名で、十二時我孫子発四ツ谷駅に十三時着、駅前の会館で食事をした後、迎賓館に向かいました。

迎賓館は、明治期のお雇い外人教師ジョサイア・コンドルの初弟子片山東熊(とうくま)が迎賓館建築担当主任に任命され欧州宮殿建築ネオ・バロック様式による東宮御所として明治四十二年完成させました。しかし、主(あるじ)に予定されていた皇太子殿下(後の大正天皇)は、あまりにも華美と感じるとともに使い勝手が良くないこともあり御所として使うことがなく、赤坂離宮と名称を改めました。終戦後、過渡的に国会図書館、法務府等が赤坂離宮に設けられては移転を繰り返してきました。昭和三十九年、佐藤内閣は世界各国の要人を迎え入れる重要性を痛感し、昭和四十二年、赤坂離宮を大改装し、外国の賓客を迎える迎賓館を整備することが閣議決定されました。本館改築の設計者は和風デザインに独特の感性を発揮する、村野藤吾に決定、現在の迎賓館が完成しました。

当日は、同館の周辺には観光バスが十台程駐車していて大変人気のあることが窺えました。警備の方に西門へ案内され受付まで行きました。

混雑時には二~三時間待ちとなる事があるようですが、今日は、見学者が少なく手荷物検査場を経由して本館に入場することができました。廊下には赤絨緞が敷かれていて、私は、絨緞は国賓用と思い、石の上を歩いていましたら、廊下は大理石となっているので、傷がつくので絨緞の上を歩くよう注意をされてしまいました。

一階の廊下を通り、中央階段を上った二階大ホールは正面の「朝日の間」の左右の壁面には小磯良平画伯の二枚の大油絵、ホールの中心には八本のコリント様式の大円柱が並んでいます。「朝日の間」は現在修理中で見学はできませんが、名称の由来は、「朝日を背にして女神が香車を走らせている姿」の絵に由来するそうです。「彩鸞(さいらん)の間」は左右の大きな鏡の上と、ねずみ色の大理石で造られた暖炉の両脇に「鸞」と呼ばれる架空の鳥をデザインした金色の浮彫があることに由来しています。この部屋は表敬訪問に訪れた来客が最初に案内される控えの間として使用されたり、晩餐会の招待客が国・公賓に謁見したり、条約・協定の調印式等に使用されています。「花鳥の間」には、天井に描かれた三十六枚の絵や、欄間に張られたゴブラン織風綴織壁面、壁面に飾られた三十枚の楕円形の七宝に、花や鳥が描かれています。最後に「羽衣の間」を見学しました。「羽衣の間」の由来は、謡曲の「羽衣」の景趣を描いた3百平方メートルの曲面画法による大絵画が、天井に描かれていることによります。この部屋は、雨天の際に歓迎行事を行なったり、レセプションや会議場として使用されており、晩餐会の招待客に食前酒や食後酒が供されるところです。その他に本館には、控室として使用されている「東の間」があります。

一時間三十分程かけて迎賓館本館を視察しましたが、どの部屋もヨーロッパ産の大理石をふんだんに使用するとともに、日本が誇る絵画や七宝焼の大家の作品が全館に施されていて、いつまで見ていても立ち去りがたい建築物でありました。

最後に、国宝の噴水がある主庭で集合写真を撮り、正面の前庭を通り帰宅の途につきました。

今回は、本館を見学するのは難しいのではないかと思われましたが、予期に反して、スムーズに見学することができ、参加者全員満足のいった建築探訪であったのではないかと思います。

我孫子の巨木・名木を訪ねる会
「樹木観察会報告」第10回

市川市：伊弉諾神社（ハリキリ）、愛宕神社（大銀杏）、里見公園（スダジイとタブの相生、シラカシの大樹）

佐々木 侑

8月18日（金）、連続降雨日が更新され続けている最中であるがこの日は曇り空で、メンバー6名が市川市の巨木観察に出かけた。

この日の行程：我孫子駅改札 9:00 集合・・・新松戸乗換・・・東松戸乗換・・・北総北国分→伊弉諾神社→北総北国分・・・矢切駅→愛宕神社→矢切駅・・・バス国立病院→里見公園→ジュンサイ池公園・・・バス松戸駅・・・我孫子 15:00

☆伊弉諾（いざなぎ）神社（堀之内 4-26）祭神は伊弉諾尊。神社の由縁は不明である。

伊弉諾神社境内のハリギリは他の樹木を圧するように立ち、大地に根を広げてゴツゴツとした太い幹を空へと伸ばしている。目通り幹囲は2.26mもあり、千葉県では最大級。

ハリギリはウコギ科の落葉高木、幹や枝が太く、鋭いトゲがあることから「ハリギリ（針桐）」の名が付けられている。6月から7月には黄緑色の花が咲き、10月に球形の実をつける。木材としても広く利用されている。

☆愛宕神社（北国分1-12-24）古くより火伏・防火に霊験のある神社。祭神は火産霊命（ほむすびのみこと）。神社の由来は不明である。

神社参道入口の左右に大イチョウが南北に2本並んでいる。2本とも雄株。北側は幹囲5.70m。南側は幹囲5.43m。2本とも正確な樹齢は不明であるが、350年前後と考えられる。2本とも自然の樹形を保ち、樹勢も衰える様子はない。

☆里見公園（国府台3-19）

園内には北原白秋の旧居「紫烟草舎」や、「羅漢の井」「明戸古墳石棺」「里見軍戦死者の慰霊碑」「夜泣石」などがある。16世紀に里見氏・後北条氏の間で2度にわたる国府台合戦が戦われた古戦場跡としても知られています。春は桜の名所として有名で、また、四季折々の花も見事である。

＊園内の奥にあるタブノキとスタジイが根本で合体し相生になっている珍しい樹木。併せた幹周は4.1m、樹高は約15m。

＊市川市内最大のシラカシ。（**下写真**）幹周は4m以上と推定される。

☆ジュンサイ池公園

緑豊かな木々に囲まれ、水と緑の憩いの場として親しまれている。春は梅、夏はツツジ、秋はキンモクセイ、もみじ・かえでの紅葉、冬は鴨などが飛来し、四季折々の自然を楽しむことができるそうな。（**左下写真**）

☆里見公園で記念撮影

第128回史跡文学散歩のお知らせ

「谷中の寺町を歩く」

休日の谷中を訪れますと中高年の方々の寺町巡りで大賑わいです。江戸情緒の残る谷中界隈は旅行ガイド誌やTVの旅番組でしばしば紹介されるからでしょうか。

当会でも谷中の街を歩きたいとの声があり、秋の一日、由緒ある寺町をご案内します。

1. 日時 11月19日(日)9時、我孫子駅改札口内集合。(小雨決行) 15時頃現地解散予定。
2. コース 千代田線千駄木駅―大円寺―全生庵―瑞輪寺―観音寺―長安寺―吉田屋―浄名院など

お弁当持参ください。

講師・ガイド　越岡禮子氏(当会副会長)
参加費　会員　無料、非会員　500円
申し込み　TEL&FAX(七一八四)二〇四七　越岡まで

第二十三回手賀沼エコマラソンを会場で応援しませんか？

美手連(美しい手賀沼を愛する市民の連合会)が出店

10月29日(日)、第二十三回手賀沼エコマラソンが行なわれます(スタート10時)。美手連ではスタート及びゴール地点(北柏ふるさと公園)に設営される会場の一部にテントを張り、手賀沼浄化をPRする「ちらし」を配布する。

当日、会場には約30のテントが設営されスポーツグッズなどが販売される。

(手賀沼エコマラソンの歴史)

ところで今年第二十三回目になるこの手賀沼エコマラソンには次のような歴史がある。

平成七年(1995)頃、手賀沼は、生活排水の流入などによりかつてのきれいな水が失われており、手賀沼水質浄化には、市や市民の努力のほか、流入する大津川、大堀川の流域の約45万人の住人の協力が必要であることが叫ばれていた。一方、当時、健康意識の高まりを反映して、健康づくりに、ストレス解消にと、ジョギングをする人が多くなってきて、全国各地で開催される市民マラソンに向けて市民の関心の高まりとともに参加者も増加傾向にあった。こうした背景から、手賀沼の水質浄化について広く一般に訴え、意識を高めることを目的に、この年(平成七年)第1回手賀沼マラソンを開催することを決定した。この大会は我孫子市、柏市、沼南町の2市1町合同による開催で、併せてマラソンを通して市町民の健康増進にも役立てる狙いもあった。

当時、手賀沼マラソンの概要については、コースは手賀沼のほぼ西半分を使用しての21．0975キロメートル、募集人数は3000人、参加資格は①18歳以上の健康な方でハーフマラソンを2時間30分以内で完走できる方②アマチュアの競技者で正式にエントリーされた方、参加費は3000円というものだった。

翌年の第2回大会には4年後のシドニーオリンピック(2000年9月)で日本女子陸上選手初のオリンピック金メダリストとなった「Q(キュー)ちゃん」こと高橋尚子選手がゲストとして招待された。Qちゃんはこの頃急速に頭角を現わしたアスリートとして注目を集めており、それから2年後の平成10年(1998)の名古屋国際女子マラソンから平成14年(2002)まで、マラソン6連覇を果たす、まさに「走れば優勝」の絶頂期を迎えることになる。Qちゃんは第5回、第6回手賀沼大会にも招待選手として市民と一緒にマラソンを楽しんだ。因みにこの手賀沼マラソンは第5回大会から名称を「手賀沼エコマラソン」と変えている。第5回大会にはQちゃんとともに増田明美も招待された。

毎年10月に行われる手賀沼エコマラソンは、現在は参加費5、000円、参加者も10、000人(市民先行3、000人、一般7、000人)にまで増加し、全国からマラソン愛好者が集まる大会になっている。

生涯学習出前講座に4講座を追加

我孫子市では「市民の主体的な学習のきっかけづくりを応援し、市民と行政、市民同士の交流を図り、地域で学びの広がりをつくる、まちぐるみで生涯学習によるまちづくりを目指す」ことを目的に「出前講座」の制度をもうけています。当会は昨年まで「親子で学ぶ我孫子ゆかりの偉人」「我孫子小学校初代教師・杉山英の紙芝居上演」(以上伊藤一男講師)の2講座を登録していましたが、今年から新たに「我孫子における平将門伝説」(戸田七支講師)「我孫子駅に降り立つた文士たち」(越岡禮子講師)「新田次郎と岡田武松―『気象の人』を巡って」「桜、あれこれ」(以上村上智雅子講師)の4講座を追加しました。

「さくらプロジェクト」賛同者募集について

我孫子市では毎年、市のシンボルである手賀沼周辺や市内各地の公園に桜を植樹し、市の魅力を高め、より一層我孫子に愛着を持ってもらうことを目的に、桜の植樹費用の寄附を募集しています。募集対象は「市内在住、在勤又は在学する者、市内に活動拠点がある法人その他団体」となっており、今年も六月に募集を始めましたが、当初の予定数(一口3万円、30口)に達したため既に締め切られました。樹名板に氏名等を記載することができます。

このプロジェクトに賛同した役員有志数名が合同で既に1口申し込みを済ませており、「我孫子の文化を守る会」の名称を樹名板に記載することになりました。さらに広く会員の方から賛同者を得たらとの意見もあり、ここにお知らせします。寄付は会としてではなくあくまで個人の寄付として考えています。

つきましては寄付(1口1、000円)にご賛同の方はメール mss_misaki@yahoo.co.jp 電話 04(7182)0861 美崎までご連絡ください。

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より　杉村楚人冠

昭和九年

秋

落馬吟（一句）

草の上にまろべば天の高さかな（註）

浦島が身にしむ木曾の残暑かな

冷泉の澄めるに浸る朝の秋

冷泉のタイルの底の秋白し

水晶と凝るらく甲斐の秋の水

澤の温泉（ゆ）の雨に籠りて秋を聴く

山の湯や霧雨しぶく片びさし

見延（一句）

木鉦のすゝとく秋の野にさゆる

天の川伊豆の小島は船を焼く

萩の徑（みち）身をくねらせて女行く

絲萩のかゝれる崖や晝の月

萩の徑の盡きてぞ萩のお茶屋なる

秋立つ日血壓はかるやもめかな

（註）昭和九年七月十二日、湯瀬（秋田県）で東北三県朝日会販売店主会議が開かれた。前年湯瀬を訪れて八幡平の景勝について聞かされていた楚人冠は、この機会に登山を試みるつもりで同行した。当時、八幡平は登山するには馬で行くしか方法はなく、一行は八頭の馬に分乗して登った。楚人冠が馬から降りようとした途端、馬が動き、楚人冠は落馬してしまった。この句はその時の落馬について詠んだ句である。同時に

これやこの地球の引力ちふものを

馬から落ちてはじめて知んぬ

という短歌も読んでいる。

現在、この場所に「楚人冠落馬記念碑」が建っている。

今後の行事予定

「放談くらぶ」

日時　10月8日(日) 14時～16時

会場　アビスタ（我孫子地区公民館）第2学習室

講師　関口小夜子氏

演題　「大人の楽しむ昔話」

（4ページ「あびこだより78号」参照）

日時　12月9日(土)または10日(日)

会場　未定

講師　戸田　七支氏

演題　「仮題・将門の王国を求めて」

◎参加費　会員無料　非会員三〇〇円

申込みTEL&FAX(七一八五)〇六七五 佐々木まで

「散歩部会」

日時　9月17日(日)第127回史跡散歩

「下総国分寺と万葉の里・市川を訪ねる」

9時、我孫子駅改札口内集合。(小雨決行)

日時　11月19日(日)第128回史跡散歩

「谷中の寺町を歩く」

9時、我孫子駅改札口内集合。(小雨決行)

「手賀沼部会」

日時　10月14日(土)「川めぐり」と木下史跡散歩

□ **プロジェクト「巨木クラブ」予定**

「樹木観察会」

第11回　9月22日(金)市川市①神明(豊受)神社のイチョウとケヤキ②稲荷神社の千寿イチョウ③源心寺の六地蔵とイチョウ④子安神社のスダジイ

第12回　10月20日(金)千葉市①検見川神社のケヤキ②子安神社のタブノキ・スダジイ③真蔵院のタブノキ④三代王神社のスダジイ・タブノキ

第13回　11月17日(金)柏市、柏ビレッジ水辺公園①大洞院のオオイチョウ②花野井香取神社のスダジイ・ムクノキ③布施弁天のカヤ・ケヤキ

□ **プロジェクト「短歌の会」予定**

9月19日(火) 13時～第七回短歌の会

けやきプラザ10階小会議室

□ **「出前講座」に次の日程で要請があります。**

9月9日(土)、10月19日(木)、10月24日(火)

以上、いずれも「我孫子における平将門伝説」

当会の最近の動き（報告・案内）

散歩部会

6月18日(日)　第126回史跡文学散歩

「江口章子縁の地と旧土村（つちむら）を訪ねる」―柏散歩（詩人江口章子の生涯）

（4ページ報告記参照）

研修部会　放談くらぶ

6月4日(日)「我孫子通行記…誰がいつどこへ何のために…」三谷和夫氏

8月5日(土)「日本の空のパイオニア・大隈重信侯」荒山影久氏

手賀沼部会

6月10日(土)美手連総会出席、

総会後の講演会に越岡禮子氏、村上智雅子氏が講演

（入会員紹介）次の方が入会されました。

竹内タケミ様

編集後記　九月になりました。九月といえば…、十五夜、お彼岸、台風、虫の鳴き声、コスモスなど思い浮かぶものは人それぞれ。身近なものとしては第三月曜日の「敬老の日」もあります。この「敬老の日」、前は九月十五日だった（ハッピーマンデイ制度による）。さらに昔は「老人の日」（老人を敬い長寿を祝う日）という名称だったのを昭和四十一年に祝日として改称・制定された▲ところで、今まで貰った敬老の日ギフトの中で、「貰って嬉しかったギフトランキング」の一位は「お花」、二位「洋服や装飾品」、三位「商品券・ギフトカード」となっている。一方、「貰いたいギフトランキング」の一位に輝いたのは「一緒に過ごす時間」でした。やはり、ご家族やお孫さんなど、敬老の日を祝ってくれる皆さんと「楽しく過ごす時間」こそ、最高のプレゼント」というのが、お年寄りの本音のようです。（美崎）

当会のホームページ　http://abikonobunka.sakura.ne.jp/